

## これまでの論点のまとめ(2009/08/08)

文責:永松伸吾

### 論点1 復興という概念をどのように捉えるか

あるべき復興はプロセス(how)で記述されるべきである。

「WHATを含めた法律なんてそもそもない。それは主人公の視線による。(中林)」

あるべき『復興』とは何かは議論できない。

「置かれている状況によってかなり差が激しいものを、一言であるべき論ということに語るということに対するちょっと違和感を感じる。(田中)」

復興の中身(WHAT)についても議論されるべきである。

「何を復興するのか、生活環境、仕事、文化を取り戻すことが復興なんだという問いかけ。都市をどうするのかという議論ではない。復興を考える時にこういう尺度を考えてくれという留意点。そこでは言えるのではないか。(山中)」

「WHATがないとプロセスも議論できないのではないか。(山中)」

「目標や状態として復興を考えるのではなく、復興は一つの局面として考えるべき(田中)」

法制度的定義：災害制度の運用から通常制度への移行期間(田中)

経済学的定義：ストック被害をフロー化する過程(田中)

社会福祉的定義：生活障害(①生活基盤、②生活能力、③生活関係、④生活環境)の解決(田中)

### 論点2 復興を特徴付けるものは何か

「破壊や疲弊からの出発」(室崎)

「時空間制約を伴う複雑系システム」(室崎)

「減災サイクルの1つの過程」(室崎)

「人々の危機感、人のつながり、特別な資金などを活用して新たな地域社会をつくっていくことが復興バネ(稲垣)」

### 論点3 復興の目標は何か

「価値観の転換。経済から平和と文化である。もっという町へ。経済の右肩上がりからは解き放たれる必要がある。」(山中)

「右肩上がりていくかどうかは地域が決めること。右肩下がり計画というのは作ったことがない。スマートシュリンキング。敗北ではない。まさにこれからの議論。」(中林)

「復興は社会創造そのものである。」(室崎)

「復興の目的は「被災の状況」「時代の状況」「地域の状況」という3つの要素によって変化する。」(室崎)

「開発という言葉に対抗して「もうひとつの社会」と言った。」(村井)

「地域が自律的に発展していけることが「創造的」な復興である。」(中林)

### 論点4 なぜ、今、復興を問うことが大事なのか。

「一定の社会構造が維持されている時期と、今の中越の復興とは明らかに違う。エポックにおける復興」(稲垣)

「システムの外部依存による不安感やあきらめ感の増大が回復力を阻害している。もう一度内部化する、自分たちで何か考えてやっていくんだということが復興まちづくりに必要」(稲垣)

### 論点5 復興の主語は何か

「行政の復興が復興ではない」

「復興って誰が決めるのかという問題。帝都復興は官であった。復興のドグマを壊すことが重要。」(山中)

「復興は都市が復興するのではなくて、都市のなかに人間がいる。人間が復興するのが大切なのだ。」(室崎)

「都市復興と人間復興を対立させたいつもりはないが、都市がよくなるということは必要条件だと思う。もちろんそれだけでは十分ではない。(室崎)」

「復興のプロセスの中で、復興の主語は人間のためにと。「被災者」だと被災者にはいろんな人がいるので100%にならない。結局は人間の社会にとってということが大切。」(村井)

「復興の主語は「人」というよりは「人々」という感覚で捉えている」(稲垣)

「今の被災者にあなたたちどうしたいのということを問うことが必ずしも適切ではないのでは。中越は次世代がいるかないかが問題。」(上村)

「復興を住んでいる人に問いかけて合意をえる、ということはその通りだと思うが、新長田の駅前の復興。住民に聞いたそうだが意見が出なかった。賃貸に住んでいたひとばかり。地域の住民がいなかった。現状は地主復興。(青田)」

### 論点6 望ましい復興のプロセスとはどのようなものか

「計画型・課題解決型・直線型に対して、創発型・プロセス重視型・非線形型の復興が重要(稲垣)」

「総論と各論の問題がある。総論は早く決める、各論はゆっくり決める。」(室崎)

「全体が見通せなくても、自分にできる小さな役割から果たしていこうという感覚は、いまではかなりの広がりを見せている。」

(村井)

「室崎先生は総論ははやく各論はゆっくりと言うが、村井さんの話だと各論こそはやくとおっしゃっているように思う。」(渥美)  
復興プロセスに必要な要素(室崎)

- (1) 連続性は新しい街を作る力を養うということ。(室崎)
- (2) 戦略性、限られた時間でどのような順番で行うかということ。(室崎)
- (3) 補完性は災害が起きると多くの被害を受けた人が無力に陥るため、災害は格差をより広げるということ、そこで市場性の論理だけに任せてしまうと、弱者はより疲弊してしまう、そこを補完するシステムが必要であるということ。(室崎)
- (4) 共創性はみんなで力を合わせて作りあげていくということ。(室崎)
- (5) 変革性でとどのつまり社会変革とすること(室崎)
- (6) 包括性というのは空間だけではないし歴史文化を含む(室崎)

災害復興の5つの基本的理念(中林)

- (1) 連続復興：避難から復興までの連続性
- (2) 総合復興：復興まちづくり・村づくりは「総合計画としての取り組み」
- (3) 地域協働復興：集落としての地域力と行政の協働
- (4) 地域こだわり復興：被災者を流民化せず、地域での取り組み
- (5) 複線復興：多様な復興ニーズに応える復興政策の多様化

復興をいかにするか三つの条件(室崎)

- (1) 歴史性と地域性、世界が画一化する時代に地域に根づいた固有性を大切にしなければならないということ。(室崎)
- (2) 持続性と共生性、環境問題のサステナビリティの問題もあるし、多文化共生の話もある。(室崎)
- (3) 自立と自治。そこに住む人が自分たちで決めて、自分たちで将来を決定していく。(室崎)

復興に必要な7つの視点：被災者にとって、次世代にとっての「復興」であるための7つのP(中林)

- ①方針：復興は見通しが持たなければならない
- ②計画：目指す目標が分かる
- ③被災者：復興の主体は被災者
- ④過程：復興の進め方
- ⑤参加：市民・被災者の参加
- ⑥政策：復興の支援
- ⑦シンボル：復興の象徴

## 論点7 行政の復興計画の位置づけとは何か。

「復興計画の法的根拠がないことの是非についてはわからない。自由で良いという側面もある。しかし、政治の影響を受けることなどを考慮すると、大規模なお金を伴う計画が密室で決められることは問題。」(中林)

「質と量についてもっと議論が必要(渥美)。行政は量だけ考えろ、我々のリテラシーで質を補うという戦略もある。」(渥美)  
「行政にとって、被災者Aにとって、それぞれ違う。行政にとっては一つの区切りが必要。主語が必要。」(中林)

## 論点8 人(人々)が復興するとは何か。

個人の復興の要素(木村)

- 「①「住宅②集落③いきがい④仕事・収入⑤再建資金⑥文化  
「生活水準を取り戻すこと。」  
「もろもろの生活環境が災害前に戻ること。」  
「被災したエリアが安全になること。」  
「まずすまいの再建。」

インフラ・コミュニティ・社会サービスと個人の復興の相互依存性

「社会サービスの提供が、個人再建の前提条件となっている(中越地震)。」(田中)

「コミュニティの再建と個人の再建が依存関係にある(中越地震)。」(田中)

「建物というモノや、制度、ヒト、モノ、ということを実際に分けて考えた方がいいのだろうか？」(渥美)

人々の回復力を高めることを中心に据えて考えるべき

「回復力を高めるために、お金をどう使うべきか、避難をどうすべきなのか、インフラをどう直すべきなのか、住宅をどう直すべきなのかを改めて見直していく必要がある」(稲垣)

「くらし」があって「住まい」がある、「住まい」があって「くらし」があるのではない。みんなで立てると言うことが当たり前にある。「くらし」の延長に「住まい」がある。」(村井)

評価軸の転換が必要

「これまでの復興を計る指標としての「豊かさ」は経済的価値であったが、それをずらす必要がある。「軸ずらし」」(稲垣)

「生理的欲求、安全の欲求だけではなくて、社会的欲求が復興には含まれる。(稲垣)」

支援される側からする側への立ち位置の転換が重要

「被災者の立ち位置が変わっている。支援をされる形から自分が何か役割を持ってやっている。」(稲垣)

「脳卒中で二回倒れて片マヒの人がまけないゾウをつくっている。避難してからは要援護者ではなくて教える側になっている。」(村井)

論点 9 復興は、災害サイクルの最後のフェーズととらえることができる。

「復興は次の災害への防災であるとならば、復興計画についても事前のとらえ方として考えるべき」(中林)

「前より安全にならないと復興とはいえないのか」(山中)

「復興は防災の一部かどうかということ。そのまえに、復興はまさに社会を創るという営みである。ただ、災害の後に行われるということだけなのだ。復興は防災という仕事よりはるかに大きな仕事なのだ。」(室崎)

論点 10 復興を支援するとは何か

「人間の限界性」、限界があるから他者の振る舞いをみとめるということ。」(村井)

「一人ひとり違う存在なのに平等でなくてはならない。それは、一人ひとりにとって平等であればいいのだ」(村井)

「被災者の声と言った時も、私的な欲望なのか、公共的なものなのかを考えなければならない。」(宮原)

「人間のためにとは、被災者が何を望んでいるかではない。本質的な人間の「自由」「自立」とは何かということが大事。」(村井)

論点 11 復興の指標は何か

「縦軸は、幸福感とか、満足感、達成感など多様なものがある。尺度の作り方の問題。主観的な軸に置き換えれば良い。」(中林)

「高度経済成長期は量。フォーディズム。これからは質。中身が問われる。復興像。」(中林)

「最終的にはひとりひとりがサステナブルであり、その集合体の地域・まちがサステナブルであるかが復興の鍵(中林)」

「そもそも評価を指標的にしなければいけないのか。多様な価値観を指標に置くべきだろう。」(山中)

論点 12 復旧・復興はどう違うか。またこのような比較に意味があるか。

「復旧と復興と概念を分けて考える場合、それぞれ何が違うのか。」(田中)

「復旧とは物しか対象としていない。人に復旧はない。」(山中)

論点 13 合意形成とはなにか

「合意形成というプロセスの意味は、被災者一人ひとりの『多義的復興』と、被災地・社会の『一義的復興』はどのように調和できるか。」(中林)

「最後の一人ということはずっと考えている。ぴたっとくる論理的な説明が難しいが、ひとりひとりの意見を大切にすると合意形成が重要で、そうすると支えあいが必要ということになる。」(村井)

「合意形成→アクション→議論→問題設定→合意形成→アクションという循環型。決めたからそれで永遠に続けるというわけではない」(上村)